

柿沼 敏江 (音楽評論家)  
Toshie Kakinuma

●クリストファー・スターク：ウィンター・ミュージック (2016)  
Christopher Stark : Winter Music

クリストファー・スターク(1980-)は、アメリカ西北部モンタナ州の豊かな自然に恵まれた土地に育った若い世代の作曲家で、このアメリカの風景の雄大な広がりを捉えようとする作品を書いている。シンシナティ音楽院、コーネル大学に学び、現在はセントルイスのワシントン大学の助教授を務める。

「冬」という季節から着想された音楽作品は数多くあるが、この作品もそのひとつで、おそらくはスターク自身の弦楽四重奏曲《スプリング・ミュージック》(2016)と対をなしていると思われる。雪や静寂といった冬にまつわるイメージをめぐる内省的な作品で、厳しい冬の心象風景を描いていく。ゆづりと保持される静かな瞑想的なメロディや厳しく強い音響、強弱の自在な変化が音楽に強い表現力をもたらしている。シューベルトの《冬の旅》から〈おやすみ Gute Nacht〉と〈菩提樹 Der Lindenbaum〉が引用されており、旅人の孤独と春への希望を象徴するかのよう、音響イメージの世界を広げてみせてくれる。

●サミュエル・バーバー：弦楽四重奏曲 作品11より 第2楽章 (1936)  
Samuel Barber : String Quartet op.11, 2nd mov.

サミュエル・バーバー(1910-1981)はペンシルヴェニア州生まれのアメリカの作曲家で、伝統的とも言える語法を用いながら、説得力のある作品を書いた。弦楽四重奏曲は26歳のバーバーがローマに滞在した折に作曲した作品で、二つの楽章から構成されている。第2楽章は単独で《弦楽のためのアダージョ》としてオーケストラ用に編曲され、トスカニーニ指揮のNBC交響樂團によって初演された。バーバーのもっともよく演奏され、親しまれている作品である。

弦楽四重奏曲の第2楽章はアダージョとアレグロの2つの部分に分かれている。変ホ短調のアダージョでは、静かな和音が長く引き延ばされるなか、メロディがまずヴァイオリンでゆっくりと奏でられ、次にヴィオラ、そしてチェロへと引き渡されていく。動きのない静止したような緩やかな動きは、深い叙情を湛え、哀しみとも言えるような表情を覗かせながら頂点へと高まっていく。

●スティーヴ・ライヒ：ディファレント・トレインズ(1988)

Steve Reich : Different Trains

ミニマリズムを代表する作曲家の一人であるスティーヴ・ライヒ(1936-)は、早い時期から録音された人間の話し声に関心をもち続けてきた。そうした関心は《イツ・ゴナ・レイン》や《カムアウト》といったテープ作品として結実する。その後、器楽作品を次々と発表した作曲家が、ふたたび人間の声に戻ってつくりあげたのがこの作品である。

1歳のときに両親が離婚したため、幼いライヒはニューヨークに住む父とロサンジェルス之母の間を汽車で行き来する時期があった。そうした経験を後に思い起こした作曲家は、もしこの時期にヨーロッパにいたとしたら、ユダヤ人として異なる汽車(ディファレント・トレイン)に乗らなくてはならなかったであろうと思いを巡らす。ライヒの家庭教師だった女性、かつて汽車のポーターとして勤務していた男性、ホロコーストを生き延びアメリカに住むライヒと同年輩の3人が当時を振り返る声が録音され、そうした声の旋律(スピーチ・メロディ)が、弦楽器によって奏されていく。

全体はつぎの3つの部分から構成されている。

1. アメリカ戦争前
2. ヨーロッパ戦争中
3. 戦後

●ベートーヴェン：弦楽五重奏曲 ハ長調 作品29 (1800-01)

Ludwig van Beethoven String Quintet in C major, op29

ベートーヴェン(1770-1827)には3曲の弦楽五重奏曲があるが、そのうち2曲は編曲であるため、最初から弦楽五重奏曲として書かれたのはこの作品のみである。モーツァルトと同様に弦楽四重奏にヴィオラを加えた編成で書かれており、モーツァルトを思い起こさせる箇所も随所にある。ウィーンの音楽愛好家モーリッツ・フォン・フリース伯爵に献呈された。

第1楽章 アレグロ・モデラート、ハ長調、4分の4拍子、ソナタ形式。ゆったりとした第1主題がハ長調で提示され、ホ長調で繰り返された後、軽やかな第2主題がイ長調で柔らかく歌われる。展開部では第1主題と経過句が様々な調で展開され、再現部となる。第2主題は主調で回帰し、コーダで締めくられる。

第2楽章 アダージョ・モルト・エスプレッシーヴォ、ハ長調、4分の3拍子、ソナタ形式。第1ヴァイオリンが柔らかくロマンティックな旋律を朗々と奏でる。第2主題はハ長調で現れるが、そのモチーフは第1楽章の第1主題を彷彿とさせる。展開部では同音反復の音型を刻む伴奏にのって第1ヴァイオリンが幅広い音域にまたがる雄大なメロディを奏でていく。再現部の後、コーダで静かに終わる。

第3楽章 スケルツォトリオ、アレグロ、ハ長調、4分の3拍子。弾むような主題が軽快に示され、各声部に飛び火するようなやり方で繰り返される。トリオはヴィオラからカノン風に始まり、同じ音型を繰り返しながら、メリハリのよい音楽をきびきびと奏でていく。

第4楽章 プレスト、ハ長調、8分の6拍子、ソナタ形式。第1ヴァイオリンがトレモロの伴奏の上で急速に上下する第1主題を提示し、経過句の音型による第2主題が変イ長調で穏やかに奏でられる。展開部では第1主題に対主題が加わって、重厚な響きをつくりだす。おどけたようなイ長調のエピソードが挿入された後に再現部となる。このエピソードがふたたび登場した後、コーダとなって、曲は華やかに締めくくられる。

## ●一柳慧：弦楽四重奏曲第2番「インタースペース」より 第3楽章 (1986) Toshi Ichiyanagi: String Quartet No.2 Interspace, 3rd mov.

一柳慧(1933-)はジュリアード音楽院在学中に最初の弦楽四重奏を12音技法で作曲した。この作品は学内の教授陣で結成されたジュリアード弦楽四重奏団によって初演された。しかし作曲家はその後、このジャンルから遠ざかる。ふたたび手がけるのはそれから約30年後のことであった。

「インタースペース」とは物と物との間の空間、時間の合間を意味する言葉であり、作曲家の時間と空間への関心を反映した作品のひとつといえる。この作品は3楽章からなっているが、今回は終楽章のみ演奏される。

終楽章は4つの部分から構成されている。導入部では、上行音型がゆづりと繰り返される静かな空間のなかで第一ヴァイオリンがどこか陰りのある流麗なメロディを奏でていく。続く第2の部分では、静寂の空間から様々な動きが開始され、それは低音弦の重厚な響きを特徴とするエネルギー溢る第3の部分へと引き継がれ、豊穡な空間をつくりだす。最後に導入部の音型が回想するように戻ってきて、静かな空間が取り戻される。

● ショスタコーヴィチ：ピアノ五重奏曲ト短調 作品57 (1940)

Dmitri Shostakovich: Piano Quintet in g minor, op57

交響曲第5番で成功を収めた翌年、ショスタコーヴィチ(1906-1975)ははじめての弦楽四重奏曲を作曲する。作曲者みずから「春の四重奏曲」と呼ぶ瑞々しい作品を聴いたベートーヴェン弦楽四重奏団のメンバーは、ショスタコーヴィチにピアノ五重奏曲の作曲を依頼した。こうして生まれたのがこの作品で、この四重奏団と作曲者のピアノによってモスクワ音楽院で初演された。作曲家にとっていちばん高い評価を得た作品のひとつであり、第1回スターリン賞第1席を獲得した。

通常のソナタではなく5楽章の組曲の形をとる。中央にスケルツォを置き、前半に前奏曲とフーガ、後半に間奏曲と終曲を配し、全体として大きな3つの部分で構成されている。バロック風の重厚な前奏曲と枯れた風合いのフーガは対照をなしている。軽妙で調子のいいスケルツォを挟んで、哀愁を帯びた叙情的なメロディを奏でる間奏曲となる。続いて切れ目なく快活で簡潔なスタイルの終曲へと入り、ロンド風に展開して曲は軽やかに閉じられる。

第1楽章 前奏曲(レント・ポコ・ピュー・モッソーレント、ト短調、4分の4拍子)

第2楽章 フーガ(アダージョ、ト短調、4分の4拍子)

第3楽章 スケルツォ(アレグレット、ロ長調、4分の3拍子)

第4楽章 間奏曲(レント、二短調、4分の4拍子)

第5楽章 終曲(アレグレット、ト長調、2分の2拍子)

## ウィンター・ミュージックについて

クリストファー・スターク  
Christopher Stark



詩人のウォレス・ステイヴンズが無についての深遠な瞑想を巡らせた『雪だるま』という詩の最終節は、「雪の中で耳を澄ます者に」というフレーズで始まる。多くの芸術家にとって、冬は豊かなインスピレーションの源であり、音楽の分野でも、長く厳しい冬に着想を得た数多くの作品が何百年も前から書かれてきた。ヴィヴァルディとハイドンはそれぞれの「四季」の中で冬を主題にした楽章を書いた。チャイコフスキーの交響曲第1番には「冬の日の幻想」という副題が付けられている。ハンス・エブラムセン(「冬の夜」「雪」)やニコロ・カステリオーニ(「冬-ふゆ」)といった現代音楽の作曲家たちも、冬を主題にした多くの作品を書いている。シューベルトのかの有名な連作歌曲集「冬の旅」や、ドビュッシーの前奏曲「雪の上の足跡」については、言うまでもない。本公演でお聴きいただく弦楽四重奏曲「ウィンター・ミュージック」は、そうした伝統と向き合い、寒く暗い冬の月日に私自身が巡らせた瞑想を表現する試みである。

セントレイスに暮らして2年になるが、素晴らしいことに、ここではミズーリ州東部の明瞭で美しい四季を当たり前のように味わうことができる。私は人生のほとんどをモンタナ州西部とニューヨーク州北部で過ごしてきたので、長い冬の日々には慣れていて、決してそれを恋しいとは思わないが、一方で、一面の深い雪が生み出す静寂や、日の差さない夕方心地よい暗闇、そこから自然と生まれる瞑想的な空間を懐かしく思う。「ウィンター・ミュージック」は内省的な作品である。その音楽は、長い冬の月日に自分自身と向き合う中で、思考が固まり、揺らぎ、ぐるぐると回り、中断し、そして螺旋状に立ち上っていく流れに導かれている。

本作は複数の要素から成っている。冒頭の長2度で上行する特徴的なメロディ、2拍3連のリズムの繰り返し、鈍いトリル、不協和音の炸裂、逆再生するように繰り返される模倣音、強い風の音を束ねたようなハーモニー、そして最後に現れるシューベルトの「冬の旅」からの二つの引用。これらの要素は繰り返し生まれながら、エネルギーを高め、発展し、広がり、やがて崩壊するが、再び集まり、また高まっていく。最終部では、シューベルトの「菩提樹」の引用に慰めが見出される。シューベルトが曲の基にしたヴィルヘルム・ミュラーの詩の中で、菩提樹は冬の旅人にささやく。「ここに来れば、お前の安らぎが見つかる」と。しっかりと立つ吹きさらしの木々には慰めと庇護があり、その枝たちは春の訪れを待ちわびているのだ。